

ビハーラレポート

No.1

AUGUST

1992

CONTENTS

いまあらためて四苦—生老病死—をみつめなおす	1
考察 仏教は医療にかかわれるか	3
検討 鷹巣町高齢者保健福祉実態調査結果をよむ	6
報告 仏教者と福祉活動 授産施設「虹のいえ」と法友会	8
Book Review 大貫恵美子著『日本人の病気観』	11
INFORMATION	12

ビハーラ

休養の場所、気晴らしをすること、僧院または寺院

『漢訳対照梵和大事典』

- 一、病人に供給す。
- 二、病のために医薬の具を求む。
- 三、病者のために看病人を求む。
- 四、病者のために法を説く。
- 五、余の比丘のために法を説く。
- 六、法を聞いて教化す。
- 七、大徳のものに供養し、恭敬するために。
- 八、聖衆に供給するために。
- 九、深経を読誦するがために。
- 十、他に教えて深経を読ましむ。

『十住毘婆沙論』卷第十六

いまあらためて四苦—生老病死—をみつめなおす

ビ
ハ
ー
ラ
発
足
に
あ
た
っ
て
—
ビ
ハ
ー
ラ
代
表
袴
田
俊
英

「仏教医学」という言葉をご存じでしょうか。

八万四千の法蔵と称される仏典の中には、実に多くの医学に関する著述があります。「釈尊」の名は「大医王」つまり「大いなる医術の王」と訳出されることもあります。特に仏伝に登場する名医「耆婆」の名は、西洋のヒポクラテスに勝るとも劣らぬ医聖として称えられました。名医耆婆が釈尊と出会い、人間的に大きく成長して行く中で生まれ、インドにおいてはアユールヴェーダ医学を吸収し、中国においては漢方医学と交流しつつ育まれてきたもの、それが「仏教医学」と言えるでしょう。

我が国におきましても、仏教の説く慈悲と利他行の具体的実践の場として、大阪四天王寺の「療病院」、「施薬院」。また勅命により全国の寺が病院の機能を持った時代がありました。さらには「悲田院」「無常院」など、仏教医療施設、また仏教福祉施設の例は数多くあります。

このように過去において、医療や福祉の分野と仏教とは決して一線を画していたのではなく、むしろ不可分一体のものとして機能していたと言えるでしょう。そしてそこにおいて仏教者達が必死に格闘していたのが四苦、すなわち人間の抱える四つの根源的な苦しみ「生」「老」「病」「死」でありました。

現代に生を受けた仏教者として何が出来るだろうか。そんな思いを持つ僧侶が集い、仏教がかつて担っていた、そして本来担うべきである使命を今日に蘇らせよう。その信念から結成されたのが「ビハーラ」であります。

「ビハーラ」とは古代インドのサンスクリット語で、休息の場所という意味を持ち、一方で僧院、寺院をも意味する言葉です。（現在、浄土真宗が先駆となり全国各地で「ビハーラ運動」が展開されています）

いまのところ仏教者が中心になってグループを発足した形になっていますが、「生」「老」「病」「死」の現場に直接、そしてより深く関わっておられます医療、福祉関係の皆様、さらには行政、地域の皆様の参加を広く呼びかけ、各々の分野の情報交換、意見交流、相互学習の場としての機能を持ち、最終的には各分野の枠組に捉われない、よりよき実践活動を展開して行くことを目指しています。

息の長い、実りある活動にすべく、各方面のご理解を賜り、「ビハーラ」へのご参加をお願い申し上げます。

仏教は医療にかかわれるか

—— 京都仏教青年会活動報告「医療における仏教のニーズについて」より

ここに紹介するのは1987年10月、京都仏教青年会主催によって行なわれた研修大会「医療における仏教のニーズについて」の第一部「広げよう医療を考える僧侶の輪」より全体会議「仏教は医療にかかわれるか」と題した部会の発表担当者（奈倉道隆氏 医師 浄土宗僧侶 龍谷大学教授 京都大学講師）のレジュメである。医療と仏教の懸け橋を模索するための資料としてここにあげる。

■ 仏教は医療にかかわれるか ■

この課題に対し、（１）仏教の立場から、（２）医療の立場から、（３）今後の社会の動きをふまえて、問題を提起し、最後に（４）仏教者が医療に関わる方法、を提案してみたい。

■ 1 仏教の立場から ■

仏教が果たして医療となじみうるかどうか歴史を踏まえて考えてみたい。

A. 仏教には古代インドで発達したアーユルベータ（生命、医療に関する聖なる知識）が浸透しており、心身を一如と見る立場から「生老病死」の四苦の克服が、仏教の根本的課題とされた。

B. 梵語のビハーラは、「寺院」と「病院」の二つの意味を持つ。すなわち寺は、求道伝道の場であると同時に、病む人、悩む人々の療養や相談の場であった。聖徳太子建立の四天王寺には、「療病院」や「施薬院」が設けられたと伝えられ、また7世紀末には天皇が全国の寺院に「療病院」を設置せよという勅令を出している。

C. 鎌倉時代に医療を職業とする漢方医師が登場するに至り、僧侶の医療活動はめだたなくなった。また江戸時代には、幕府が仏教教団の勢力を恐れて宗派間の分断をはかったり、僧侶が医療や社会事業にたずさわることを好まなかったので、教学からこうした視点が消え、僧侶の任務は死者儀礼に限定されていった。

D. 幕府が廃止されて120年になる。が、仏教教団は死者儀礼に枠づけられた因習から脱却したとはいえない。むしろ現代の葬祭産業に順応する一部の僧侶の行動はその傾向を強める働きをしている。

E. 仏教教団が、ビハーラを重視する本来の姿勢をとり戻す努力をするならば、医療となじむことは容易である。しかし現状のまま進むならば医療に関わる力を持ちえないであろう。

■ 2 医療の立場から ■

近代的な医療が果たして宗教となじみうるかどうか、歴史をふまえて考えてみたい。

A. 西洋の病院は、中世キリスト教会の

Hospital, Hospisを起源とし、修道尼（Sister）による「看護の医療」が基盤となって成立した。近世以後は医師がこれに加わって科学技術による診療をおこなうようになった。この診療と看護が協調して進められるのが近代医療の構造である。

B. 近代において、科学と宗教は分立したが、宗教性を排除することなく、Chaplain（病院牧師）の働きを重視したり、患者の人権尊重の思想の中にそれを生かしている。

C. わが国が近代医学を移入する際、宗教性と切り離して科学技術のみをとり入れた。宗教性に替えて儒教倫理との結合をはかり、「医は仁術」と強調してきたが、儒教思想の後退とともに日本の医療は思想性を失った。その結果、人間軽視の傾向を強めてきている。また一方、仏教は死者儀礼を司るものと誤解されてきたので、死を拒絶する従来医療との間に交流は芽生えなかった。

D. 医療では、生命の尊重がうたわれる。が、それは生物的生命の尊重であり、生きる意味を重視する「いのち」の尊さは見失われている。宗教性の欠落が原因と言えよう。

E. 現代社会は、人間そのものよりも人間のもつ労働力に価値がおかれたり、功利主義が横行する。それが医療にも浸透している。また、経営の論理が医療を支配している。このような状況では死を前にして「いのち」には価値が認められず、死を看取る医療も重視されない。

F. 今日の医療は医療担当者と患者との間に技術やものが介在し、人間相互の共感的交流が持ちにくい。このような医療

では死について語り合うことは困難であり、また患者の「いのち」は孤独の中で燃え尽きていく。

G. 医療技術の高度化によってその傾向は強まり、医療の持つ宗教性はますます希薄化しつつある。医療がこのまま進むならば仏教とのかかわりはより困難となるであろう。しかしこれからの医療が、人間機械論に基づく「修理の医療」でなく、「いのち」を支える本来の医療にたちかえろうとするならば、内在する宗教性を顕在化することが必要となる。そうしたとき、仏教者との交流が強く求められるようになるだろう。

3 今後の社会の動きをふまえて

近代からPost Modernの時代に移行しようとする現代社会は、医療に対しても宗教に対しても新しい要請を示しつつある。その動向をふまえて仏教と医療とのかかわり方を考えてみたい。

A. 医療技術の発達で急性の疾患はかなり治療効果をあげうるようになったが、慢性の疾患や難病は増加する傾向にある。従来のように患者が受け身で医療を受けるのではなく、病気を主体的に受けとめて、意欲的に医療を受けることが重要となった。「いのち」の目覚めが患者にも、医療担当者にも必要となってきている。

B. 終末期における身体的苦痛が医療技術でかなり解決できるようになって、医療が終末期患者をかなり積極的に見るようになった。身体的苦痛の解決は出来ても、精神的苦悩はむしろ顕在化するようになり、新しい援助方法が求められるようになった。

C. 医療に対し、延命だけでなく残され

た人生の充実 (Quality of life) が求められるようになり、患者が死を主体的に受けとめられるよう援助する必要が高まっている。「告知」もこれをぬきにしては困難である。

D. 治療困難な患者の治療にあたる医療担当者が、技術の限界を認識し、いま患者に何をなすべきかで迷うことが多くなる。哲学、宗教の立場で対話を求める医師や看護婦などがふえてきている。

E. 機械化、情報化が進む現代において、人間として自己を貫徹することの困難さを感じずる人々が多くなり、日々の生活の依り所となる宗教を求める気運が高まっている。一方、公害等の環境問題や高齢化の進行などから健康への不安もたかまっており、これらに総合的に対応できる宗教活動を求める気持ちも強くなってきている。(生きることへの不安感がしばしば健康上の訴えとして現われることがあり、これは医療技術で対応しても解消しない。宗教的対応が不可欠である)

■ 仏教者が医療に関わる方法 ■

仏教と医療のかかわりは、克服すべき問題が多くあるが、今出来ることから手がけて現われてくる問題を解決しつつ前進することが必要であろう。いま可能な方法について考えてみたい。

A. 人間医療を目指す医師や看護婦と、仏教の活性化を求める僧侶との交流を活発にして、チームを組める条件を整備していく。

B. 僧侶に限らず、仏教徒が進んで病院ボランティアとして医療にかかわり、老。病、死の苦ととりくむ患者を支援すべく奉仕活動を行なう。

C. 終末期の患者に宗教的ニーズの多いことは確かであるが、慢性病で療養する患者の生の充実 (Quality of life) も重要である。医療の一環としてのこれらの患者の働きかけに協力していく。

D. 患者のみでなく患者の家族への支援にも努める。患者が死を迎えたときには家族に対するGrief Workをおこない、あらたな生きる希望が生みだされるよう援助する。

E. 寺院へ医師や保健婦を招き、健康相談や健康講座を開く。寺院の本来の姿がビハラーであることを一般の人々に知ってもらい、医療とのなじみを強めていく。

F. 仏教者自身が医療とのかかわりを通して自己を深め、心身一如の立場から活発な教化伝道活動を進めていく。

■ 総括 ■

「仏教は医療にかかわれるか」という課題に対して、次の点を強調したい。

A. 仏教も医療も、歴史的考察からかかわれる性質を内在している。

B. 仏教も医療も、本来の在り方が失われかかわりにくい障害をかかえている。双方ともその障害を克服することが、それ自体として必要であり、またかかわりを志向する努力が障害の克服を助ける。

C. 今後の社会情勢は、両者のかかわりを強く求めており、努力する時期は到来したと考える。

D. すでに志しある僧侶や医療職が、問題を抱えながらも活動を始めており、また実践できる道も開かれてきている。苦難をいとわず、なすべきことに打ち込んで衆生のために尽くす僧侶の目覚めが、いま待たれているのではないだろうか。

授産施設「虹のいえ」と法友会

能代山本地区曹洞宗僧侶の福祉実践活動

袴田俊英

藤里町曹洞宗月宗寺副住職

はじめに

曹洞宗能代山本地区の若手僧侶の集い、法友会では昭和六十三年より毎年十二月に、歳末助け合い托鉢修行の浄財の一部で餅米などを買い、藤里町にある授産施設「虹の家」で「もちつき大会」を行なっています。

始めたきっかけとなったのは、托鉢の浄財の使い道をどうしようかということからでした。全て歳末助け合いの募金に回すよりも、実際に自分達の手で何かの活動が出来ないものかとの意見が出され、たまたま開所されたばかりであった「虹のいえ」の施設長はじめ職員に方々の御理解と多大な御協力により、行なうことが出来ました。

内容は、午後1時より開会式、挨拶や自己紹介などの後、2時より法話と坐禅、2時半よりもちつき、3時全員で会食（虹のいえ自慢のおつけものなども出されます）、3時半閉会式となります。

次に施設や「もちつき大会」の様子を紹介などをかねて、「虹のいえ」入所

者、「虹のいえ」寮長、法友会メンバーの所感を紹介します。

精神薄弱者授産施設「虹のいえ」

秋田県山本郡藤里町矢坂字下一の坂2-1

法友会の人達とのふれあい

金沢一弘

「虹の家」入所者

法友会の人達とふれあって2年目を迎えることが出来ました。僕としては初めての体験でした。

最初の年はとても大変だったです。とくに一番苦しんだのは坐禅でした。一分にも満たないうちに足がしびれてきましたが、そこは我慢をしてジューッと耐えましたが、立ち上がることが出来ませんでした。

次に臼と杵を使用して「もちつき」が始められました。僕自身が実際に杵でついたことがなかったので、これは二番目に苦しかったことです。

でも、完全につき終わって何ヶ条かの約束ごとを全員でいいながら、おもむろにつきたての餅を食べたときは、寮生達

全員で「うまいうまい」の連発でした。味の方はとてもおいしかったです。あんまり甘くなくて、ガッコとうまくマッチしていました。（味は最高でした）餅を食べてからも皆で話がたえませんでした。ちなみに僕はおかわり4杯分を食べました。毎年毎年来て僕たちを喜ばせてほしいというのが皆の願いです。

次に法友会の人達とコミュニケーションをとって、女の寮生何人かと、法友会の人達と遊び、その他を通して僕たち寮生の考えていることを輪わかってくださって、とてもうれしく思いました。とても良い日だったです。

二年目には坐禅もうまく出来るようになったし、もちつきもなれたせいか苦しくはなかったです。

一年目にプレゼントされた「トランシーバー」、二年目にプレゼントされた「卓球台セット」は、今現在でもきちんと使用されています。

今度もちつきだけでなく、虹のいえのうまい人（少し出来る人）と、法友会の人達と対戦したいナー。

法友会会報『法友』No.28

（平成2年3月9日発行）より

「虹のいえ」から

桜田星宏

授産施設「虹のいえ」寮長

昭和の終わりを告げた昨年の暮れ、ホールから青い空を眺めることが出来る新装なった施設に法衣をまとった、おしょうさんがみえた。

それも若い113人のおしょうさんだ。

自己紹介はむずかしい法名をおもしろおかしく、しかもユニークなおしゃれ言

葉をたくさん流し、産業、観光案内まで添えて私達を笑わせた。そして難しい説法、坐禅と仏の教えを説く。さすがはおしょうさんだ。行儀の悪い寮生も、この瞬間だけは緊張の面持ちでキチンと教えを守っている。

さあーもちつきだ。ホールに備え付けて三つのウスをみんなで囲み、掛け声も勇ましくおしょうさん、寮生が交替でキネを力いっぱい高く振り上げる。アイドリもユーモラスなリズムで笑いが大きな輪になって餅が出来上がる。

待ちあぐねた餅が食堂に運ばれると、寮生は早くも口を静かに動かし、唇をかみしめている。「早く食べたいよ」の寮生の皆の表情が、窓ガラスに大きく映っている。当番寮生の「いただきます」の聲が食堂いっぱいにかんだかく広がると、ニッコリ笑っているのは誰でもない職員達です。

昨年の4月、精神薄弱者50名を収容し発足した社会福祉法人、授産施設「虹のいえ」に、これまで施設見学者は数百名にのぼりますが、おしょうさんがみえてくれるとは、誰もが考えたことがありませんでした。

しかも感動したことは、寒い冬の暮れ、皆さんが托鉢行脚で得た抛出金を私達に下さったと聞いて、只々涙溢れる感謝の気持ちでいっぱいでした。

さらに、私達が、野外訓練や寮生の事故防止のため、一番欲しかった高価な無線機を二台も送って下され、手を合わせて拝み喜びました。

おしょうさん、有難うございます。寮生は心から感謝し、職員一同胸をふくらませその感激に浸っております。

授産施設「虹のいえ」は、精神薄弱者福祉法に基づく授産施設で、18歳以上の

精神薄弱者を収容し、社会生活に必要な生活訓練や職業訓練を行なうことによって、社会参加、社会自立させることを目的とした福祉施設です。

そのためには第一に、体づくり、心づくり、仕事づくりをモットーに、身辺処理能力の確立、社会的行動、精神衛生の向上を目指す。また治療訓練、余暇指導面で各種スポーツ活動や、音楽、社交ダンスなど、情操教育は勿論のこと、さらに寮生の職業指数を見だし、その特性に応じて授産科目を分類し、働く喜びを作るよう努力しております。職員は、施設長のほか25名で、内訳は生活指導員、作業指導員、栄養士、看護婦、調理員、事務員とにわかれ、県や町や地域住民の指導、御協力を得て運営しております。

「おしょうさん、また来てね」は、寮

法友会会報『法友』No.25

(平成元年1月23日発行)より

「虹のいえ」を訪れて

伊藤良弘

法友会会員
能代市鶴形海蔵寺住職

生、職員の心からのお願いです。

時刻に遅れながらあたふたと玄関に入り、私は正直言って戸惑った。

大勢いるこの人達の中で、一体誰が先生なのか園生なのか区別できなかつたからである。

「虹のいえ」という施設がどういうところであるか、概念としては頭に入っている、中身については全く無知だった。

そんなことを思えば、この機会は「知

らないが」自然の場合と、「知らない」が不自然の場合があることを、嫌というほど痛感させられたばかりでなく、自分の未熟さを自覚した貴重な体験であった。私達の希望を受け入れてくれた「虹のいえ」の先生をはじめ、企画提言された方、執行部の皆さん、本当に有難うございました。

会長挨拶、法友会諸兄の自己紹介、そして「あいだみつを」さんの詩をわかりやすく説かれた宝昌寺御老師の法話というように進められた。

この事業は法友会にとっては、いままでにない画期的なことだと思う。

山内において黙々に行ずるよりも、一つの在り方ならこうしてアクティブに参画していく姿勢にも、立派に行という本質を見ることが出来るからである。むろんこのことは私一人でなく、当日参加した諸兄の誰もが感じたのではないかと思っている。

一生懸命取り組んだ「坐禅」。大きな掛け声をかけ、楽しそうに過ごした「もちつき」。おいしい、おいしいを連発して、おかわりしたあの純真な表情。浮かんでくる姿すべて私達と同じである。指導者の真心と熱意が感じられ場面ばかりである。

あんなにしっかりしているのに、どうして私達と同じように生活し、働くことが出来ないのだろうか。

本当は、自分はまとも、と過信して毎日をひょうひょうとしている私達「一般人」と言われる中に、とんでもない罪を犯す人がいる事実があるのである。そんな私達こそ「健常」でないのかもしれない。仏道に於ける善悪の基準をあらためて考えさせられた(平成元年1月23日発行)より

日本人の病気観

— 象徴人類学的考察 —

大貫恵美子著

岩波書店

1985年3月発行 定価2200円

著者はウィスコンシン大学人類学教授（1985年現在）。日本人の日常的な衛生観念、健康・病気に関する諸観念を人類学的手法をもって分析考察している。

この本が他の類似書と異なる点は「健康」「病気」という概念を西洋で育まれてきた近代生医学（それはいうまでもなく西洋特有の文化的要素を背景にしている）に基づいて規定するというこれまでの常套的方法ではなく、あくまでも日本特有の文化的側面から考えているところにある。

著者は健康・病気の相対的關係は、どの文化でも一番根本的な宇宙観によって規定されるとし、古代に中国から導入された陰陽二元論の思想が現代日本人の根本的な考え方として今なお息づいているという。

陰陽論では、陽は陰なしに存在せず、陰はまた陽の芽をその中にはらんでいるというように陰陽は必ずしも相互に排他的なものでないが、それと同じく日本人にとって健康と病気は明確に区分できる対立的な関係ではないという。その証拠に挙げているのが「体質」「持病」の観念である。日本人は持病、体質を一生つきまとうものとしてごく普通に考えている。つまり日常の宇宙から病気を徹底的に追い出すことをしない。反対にアメリカ

力では持病、体質という観念は文化的には存在しないという。日常的な状態とは病を追い出した完璧な健康を持続するのが理想だという。

このことから日本人は病気に対して肯定的だと著者はいう。たとえば患者一人あたりの入院期間が日本39.4日に比べ、世界第2位の西独14.9日、アメリカ7.9日（1893年、WHO調査）という例や、また入院期間中の見舞や差し入れへの寛容さ、家族の看護付き添い、日用の身の回り品の持ち込み（つまり日常生活の延長上にある入院生活）など、いかに入院生活に対して肯定的であるかを説く。これに対しアメリカでは入院とは完全に社会的にはマイナス状態であり、なるべく日常とは関係を遮断し出来るだけ早い退院を心掛けるというのと好対象であるという。

また、日本ではたとえば外から家に入

るときは必ず靴を脱いでスリッパにはきかえ、座敷には靴下か足袋で、便所にはまた別のスリッパをとという具合にごく日常的な行動の中に内と外、清潔と不潔を区分しているがこれらの観念は考えるまでもなく黴菌などの西洋医学的な観点からは説明できない日本文化的な定義である。

以上のように健康と病気が基本的には日本独自の文化的要素によって定義づけられていると同様、浄と不浄、内と外、清潔と不潔など日常的な衛生観念のすべてが、じつは西洋近代生医学の定義とは無縁の観念によって支えられていることを本書は明らかにしている。そうした観点から漢方などの民間療法や、神社仏閣など宗教の果たしてきた医療的役割（宗教者の治病祈禱や、病気の時の寺院、神社へのお参り、また病気治しのお札など）の重要性を指摘している。

医療人類学の分野では「病」は医学的検査によってではなく、その病者の所属する文化によって規定されるという考え方にたつ。本書は、西洋近代生医学と伝統文化の諸観念の複合によって成立している日本の多元的医療制度の特質を明らかにしているが、これは私達が「病」を考えると、たんに生医学的技術のみでなく、その文化の持つ宇宙観や宗教など殊に精神的な側面への配慮が大切であることを察知させるものである。

本書から得られる知見は少なくないが、その一つに日本の医療や福祉など人間の心身に関わる分野での取り組みにおいて、西洋文化を背景にした欧米の医療技術や福祉制度などの直接的輸入を懸念させるとともに、在来の文化の中に伝えられてきた伝統的療法、間人ネットワークなどの役割の重要性を再認識する必要を喚起させられることがあげらるだろう。

INFORMATION

「ビハーラ」最初のアクションとして公開講座（8月24日鷹巣広域交流センター）を企画しました。「いのちを見つめるー医療と宗教の接点ー」と題し、能代市日蓮宗本澄寺住職で医師でもいらっしゃいます柴田寛彦氏を講師にお迎えし、医療と仏教の歴史、現在の問題点などについて講義をしていただきます。仏教と医療の新たな展開を考えるガイダンスとなると考えています。

今後も福祉、医療、仏教の各分野の方々と交えての学習会、実践報告会、公開講座等を企画していきたいと考えております。そうした活動の中から具体的な実践の方途を見つけ出して行きたいと考えています。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

会報「ビハーラレポート」年6回の刊行予定です。ご意見等お寄せ下さい。

次回は第1回定例学習会9月下旬～10月頃の予定です。これからの連絡は郵便が主になります。事務局までご住所をお知らせ願います。

会報の制作費、郵便事務、講座、学習会の運営など会費にてまかなって行きたいと考えています。年会費2000円位でいかがでしょうか。

文字どおり若僧の集まりです。大いにご正

らびご教導のほどをお願いいたします。

ビハーラレポート

第1号 1992年8月24日発行

ビハーラレポート発行所

ビハーラ代表兼能代山本地区事務局

藤里町月宗寺内 袴田俊英 電話0185-79-2468

大館比内地区事務局

大館市源守院内 越姓玄悦 電話0186-49-6957

鷹巣地区事務局

鷹巣町龍泉寺内 佐藤俊晃 電話0186-66-2032